

学 会 報 告

第2回ベトナム学国際会議

岡江 恭史

世界中のあらゆる分野のベトナム研究者が一堂に会する第2回ベトナム学国際会議が、ハノイ国家大学とベトナム社会科学院*の主催で2004年7月14～16日にホーチミン市の統一会堂（旧南ベトナム大統領官邸）にて行われた。テーマは「発展と統合への道を進むベトナム：伝統と現代」である。

今回は約550人の参加があり、うち外国からの参加者が約120人（うち日本が最多の約30人）であった。発表言語は英語もしくはベトナム語であったが、外国人研究者の多くもベトナム語で発表した。なお私（岡江）自身にとってベトナム長期滞在中にこの国際学会で発表する機会を得たことは、ベトナム語による論文やプレゼン資料の作成に際してネイティブチェックが受けやすかったという面でも、非常に幸運なことであった。

14日午前の開幕式において、ハノイ国家大学 Phan Huy Le 教授（ベトナム歴史学会会長）が「ベトナム研究の発展と国際交流・協力」と題する基調講演を行った。この中で Le 教授は、中国の漢籍による研究からフランス植民地期に導入された近代科学、そして独立後のベトナム人自身による研究、ドイモイ後の国際化と、ベトナム研究の歴史を振り返った。また現代のベトナム研究に関しては、旧宗主国フランスはヨーロッパにおけるベトナム研究の先駆者であり中心であり続けているが近年停滞していること、以前はベトナム研究が盛んだったロシア・東欧では共産政権崩壊後には急速にベトナム研究が凋落したこと、アメリカではベトナム戦争終結後は不振だったベトナム研究が最近再び盛んになってきたこ

と、最近の傾向として日本・韓国・東南アジア各国の大学などでベトナム研究を行うところが急速に増えていることなどの指摘があった。特に日本は、現在最もベトナム研究者の層（世代的にも分野の面でも）が厚い国として評価があった。

14日の午後から16日にかけて、各分科会（「経済」「社会」「民族」「教育」「前近代史」「近代史」「文化（国民統合）」「伝統文化」「言語・文学」「地域研究」の10分科会）ごとの部屋に分かれて約300の個別報告があった。だがこの個別報告の中で、分野・方法論を問わず何らかの形で農業経済に関わる報告（農村経済・都市への労働力移動等も含む）は、私の知る限りわずか13報告のみであった。農村人口がなお8割近くを占めるベトナムの現状を考えれば、農業経済分野の研究の重要性はもっと認識されるべきであろう。

なお私自身は「銀行融資と紅河デルタ村落」と題してデルタ中央部ナムディン省での調査事例を報告し、近代的な金融制度の農村部への浸透を村落構造との関係で論じた。ベトナム語での質疑応答には苦勞したが、現地研究者と有意義な交流ができたと思う。

ちなみに、第1回ベトナム学国際会議は首都ハノイのバーディン会議場（国会議事堂）で1998年に行われ、今回は2009年に中部の中心都市ダナン市での開催を予定している。現在私はハノイ近郊のハイズオン省で畜産専門農協の調査を行っているが、第3回ベトナム学国際会議では是非この調査について報告したい。

* 国立研究所群を統括する政府機関。岡江の受入先である経済研究所もその傘下にある。